

～令和7年度 緑の現況調査より～

# なごやの緑



令和8年3月  
名古屋市

# 名古屋市緑被地の分布

## ? 緑被地とは

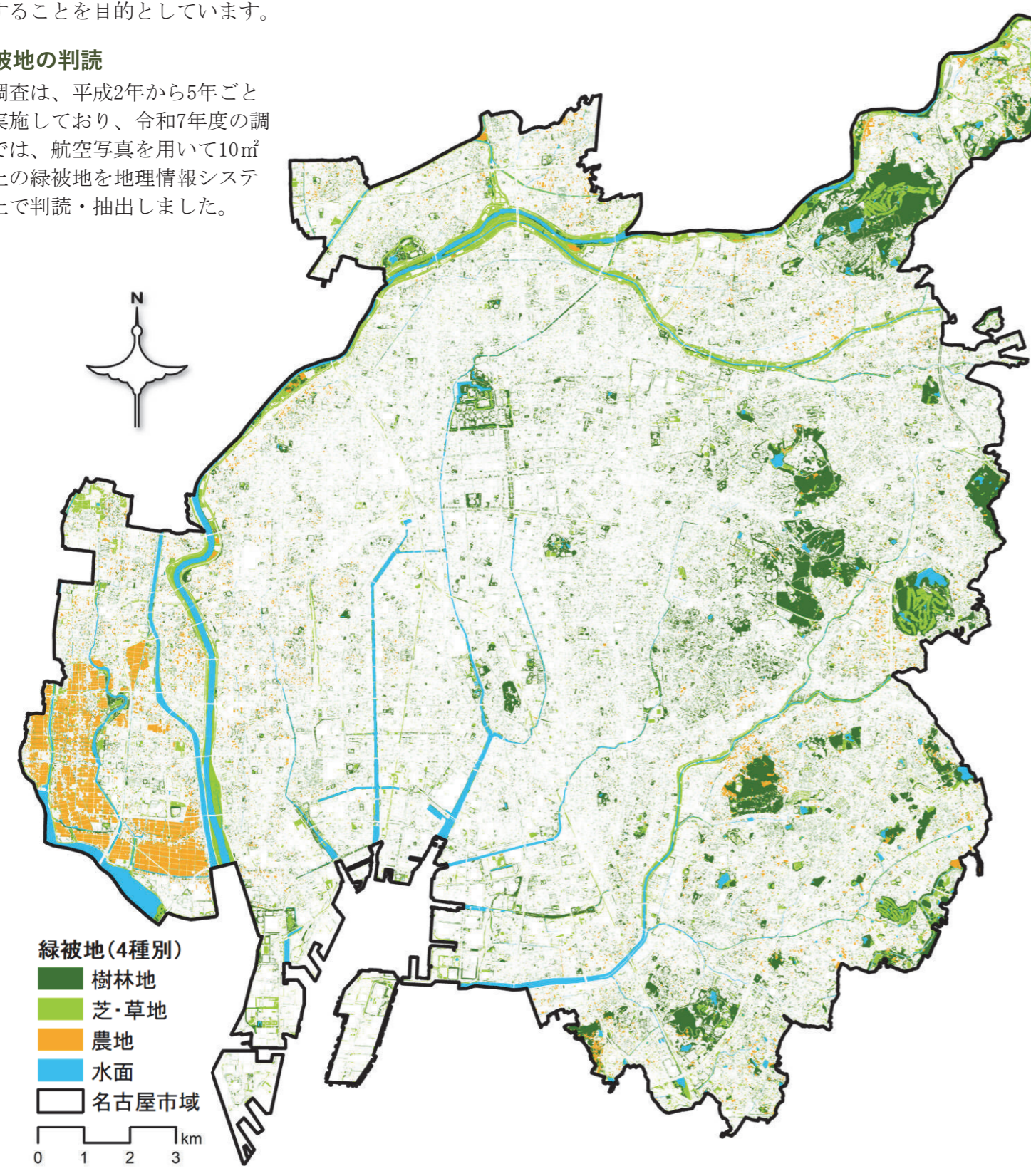
「緑被地」とは、樹木や草で覆われた土地のことで、本市では農地や水面も緑被地としています。市域等の面積に対する緑被地面積の割合「緑被率」から本市の緑の現況を把握することができます。

## ● 調査の目的

名古屋市では産学官民（事業者、教育・研究機関、行政、市民・NPOなど）のパートナーシップにより“みどりと人がきらめく 自然共生都市・なごや”を目指しています。本調査は、名古屋市の緑の現況、推移を把握するとともに、緑のまちづくり推進に向けた基礎資料とすることを目的としています。

## ● 緑被地の判読

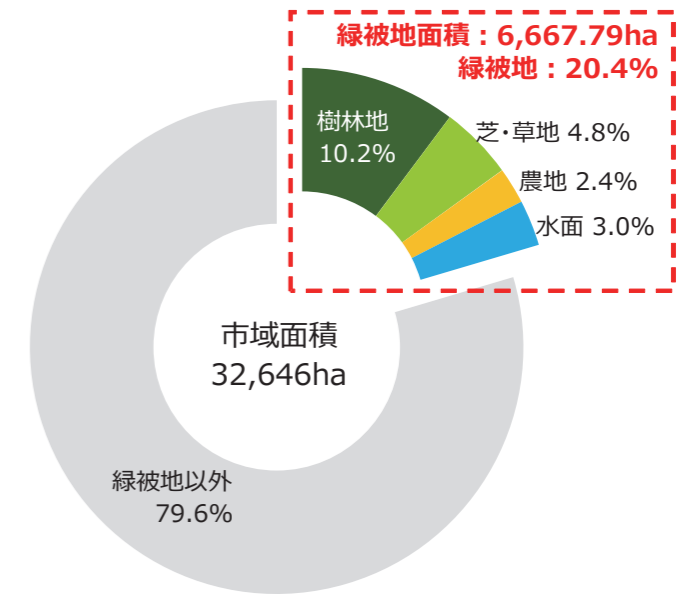
本調査は、平成2年から5年ごとに実施しており、令和7年度の調査では、航空写真を用いて10㎡以上の緑被地を地理情報システム上で判読・抽出しました。



# 緑被率の現況と緑被地の変化

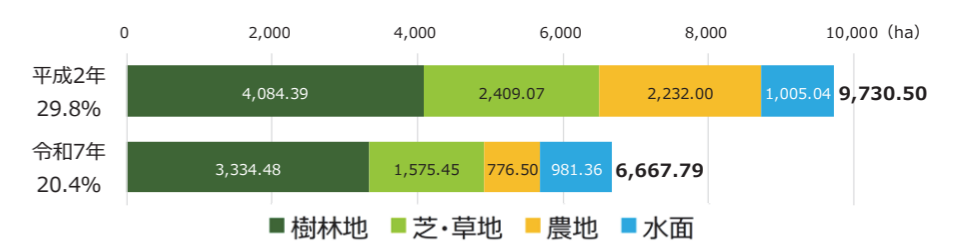
## ● 名古屋地域全体の緑被率

市域全体の緑被率は20.4%でした。内訳は、樹林地が10.2%、芝・草地が4.8%、農地が2.4%、水面が3.0%でした。



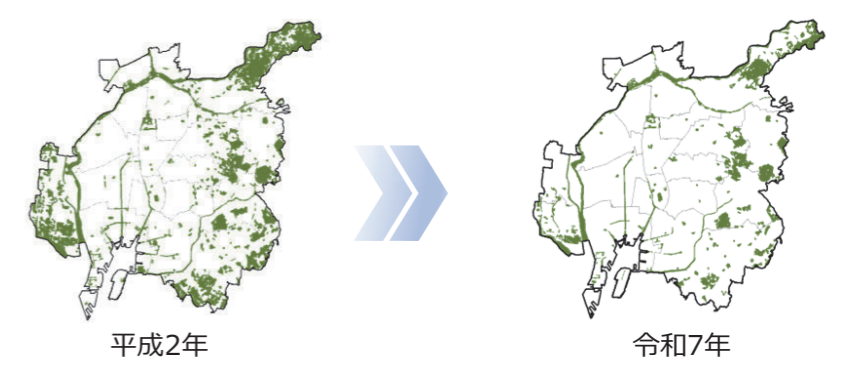
## ● 緑被地(4種別)の変化

緑被地は全体的に減少していますが、その中でも農地の減少が最も大きく、次いで芝・草地、樹林地の減少が大きい状況となっています。



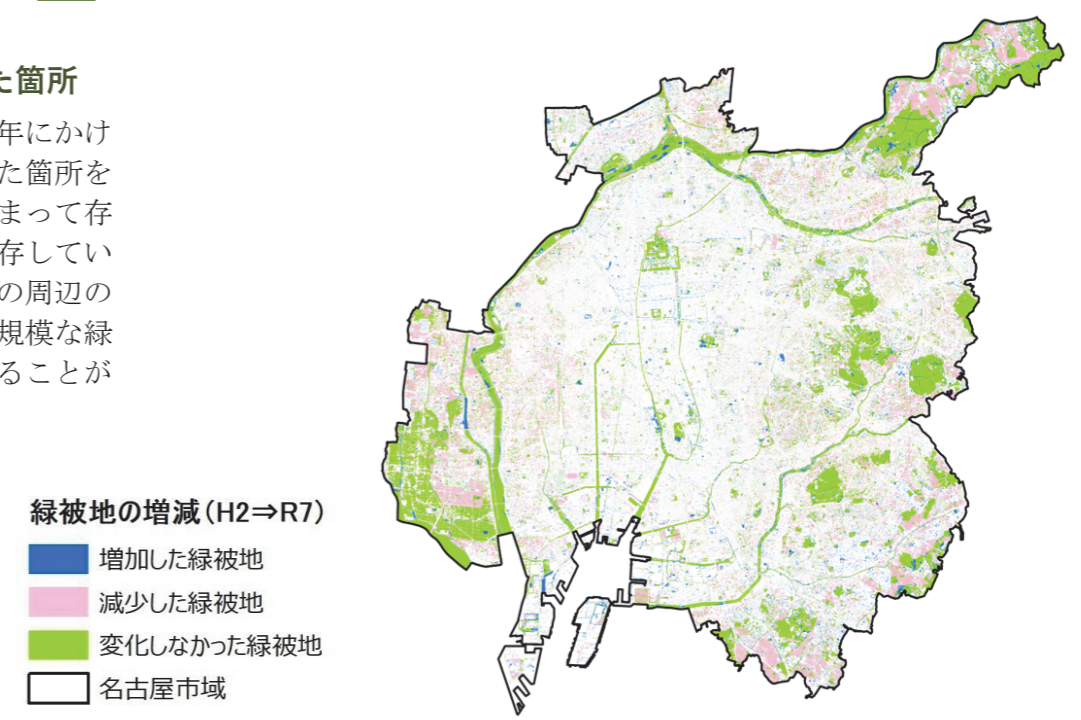
## ● 名古屋市の緑被地の変化

本市の緑の変遷をみると、市街地の拡大とともに、まとまりのある緑の細分化が進んでいることがわかります。



## ● 緑被地が変化した箇所

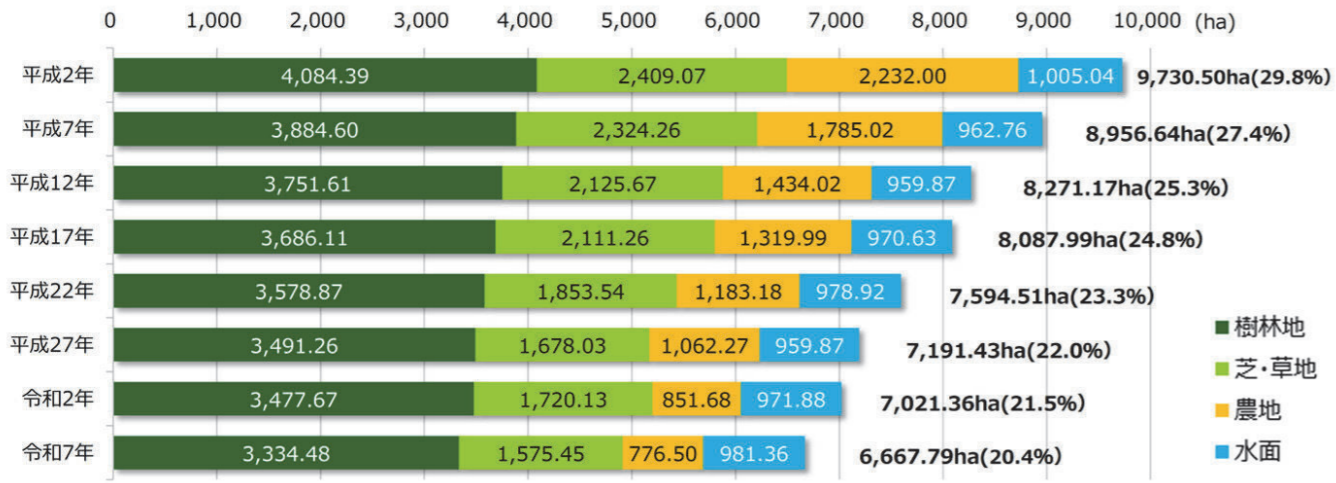
平成2年から令和7年にかけて緑被地が変化した箇所を見てみると、まとまって存在する緑被地は残存しているようですが、その周辺の緑被地や比較的小規模な緑被地は減少していることがわかります。



# 緑被地面積の変化

## ●平成2年から5年ごとの緑被地面積と緑被率

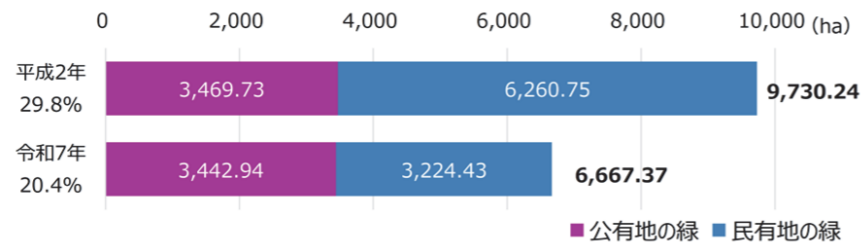
令和7年の本市全域の緑被地面積は6,667.79haであり、緑被率は20.4%でした。平成2年の9,730.50ha、29.8%と比較すると、35年間で3,062.71ha、9.4ポイント減少したことが分かります。



## ●公有地・民有地の緑

### ●変化の概要

民有地の緑被地が大きく減少する中、公有地の緑被地はわずかな減少にとどまりました。それに伴い、緑被地全体に占める公有地の割合が増加しています。



### ●変化の詳細

#### 公有地の緑 (約27ha減少)

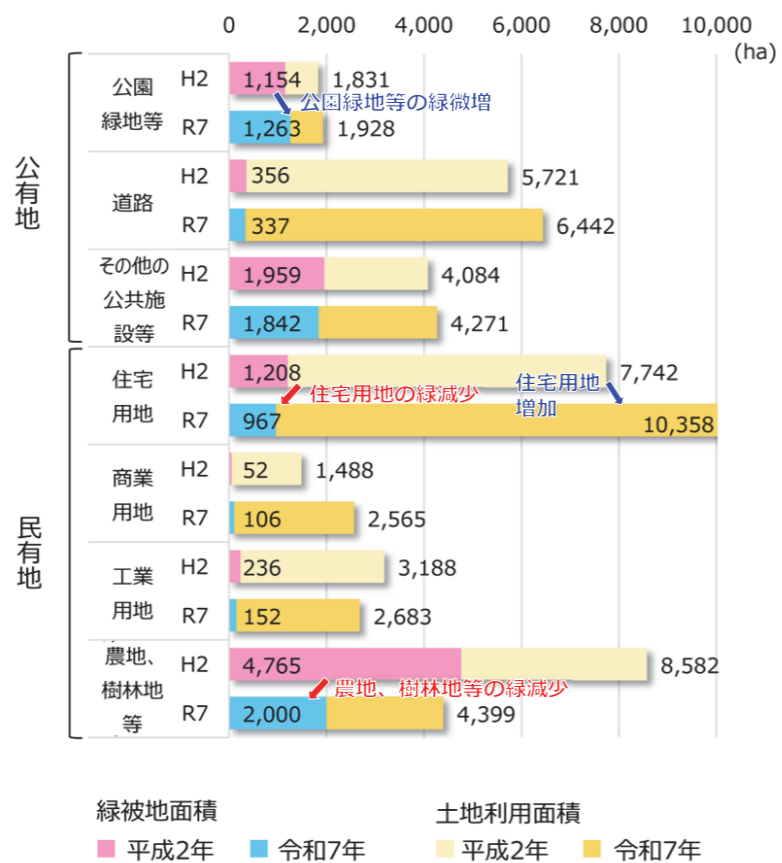
道路やその他の公共施設の緑被地は微減していますが、公園緑地等の緑被地は微増しており、公園緑地等の整備などによるものと考えられます。



公有地の緑 (白川公園)

#### 民有地の緑 (約3,036ha減少)

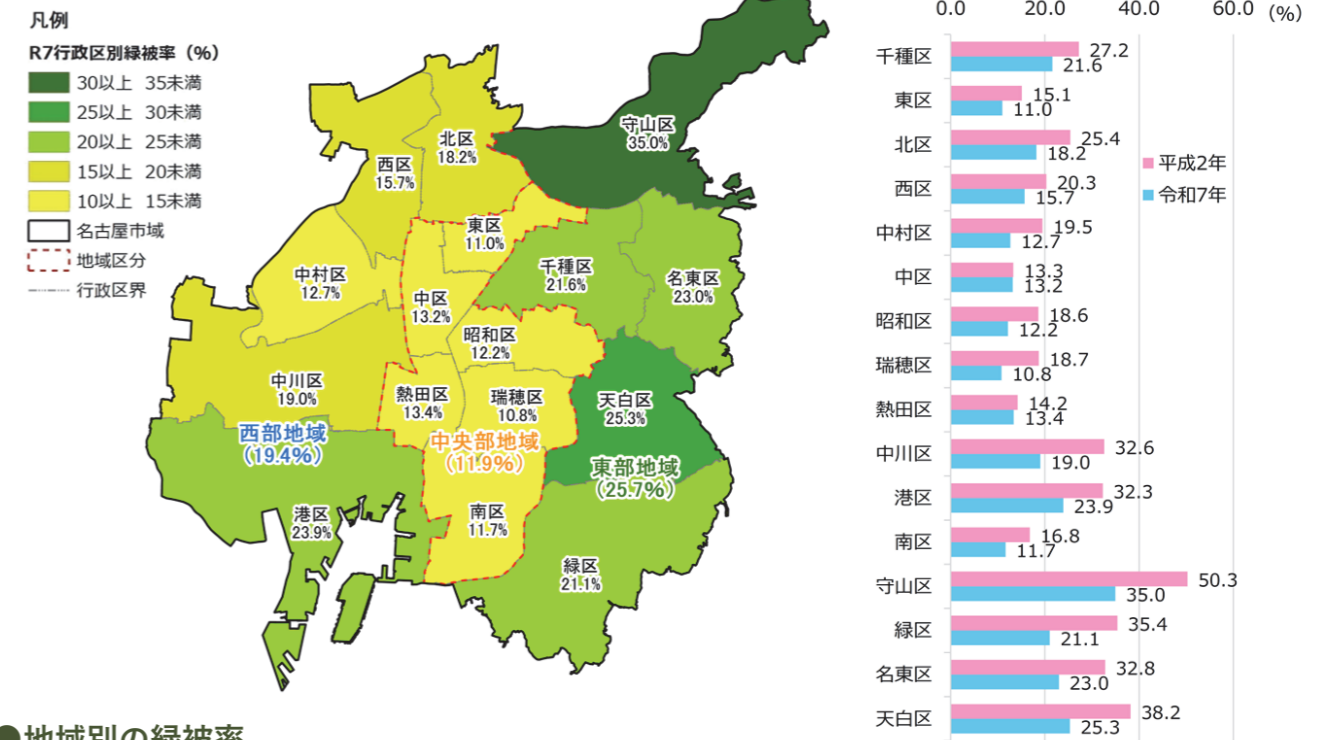
農地、樹林地等の緑は特に大きく減少しており、土地区画整理事業や宅地化の進展による影響が大きいと考えられます。住宅用地の土地利用面積は増加していますが、緑被地面積は減少しています。



# 地域別の緑被率

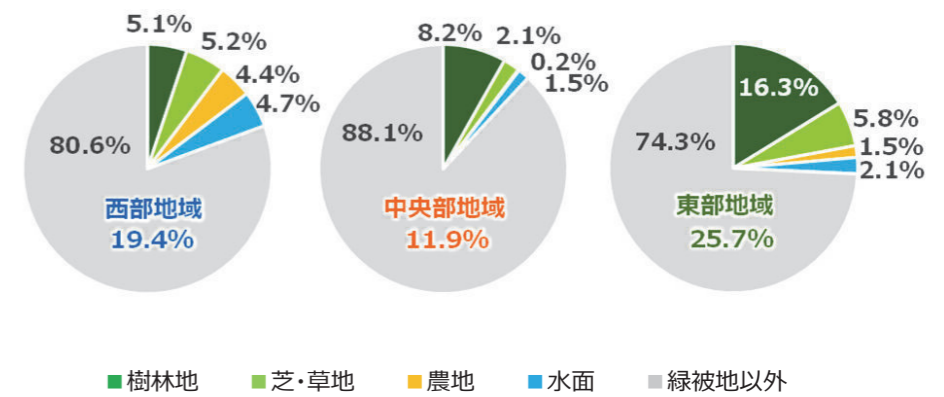
## ●行政区別の緑被率

行政区別の緑被率をみると、守山区(35.0%)が最も高く、天白区(25.3%)、港区(23.9%)、名東区(23.0%)などの区で全市平均(20.4%)よりも高くなっており、中央部地域にある区で緑被率が低くなっています。平成2年と令和7年の緑被率を比較すると、全ての区で減少していますが、守山区、緑区、中川区、天白区で減少幅が大きい状況となっています。



## ●地域別の緑被率

地域別の緑被率は、西部地域が19.4%、中央部地域が11.9%、東部地域が25.7%となり、東部地域の緑被率が高くなっています。これは、主に丘陵地の樹林地が多いためです。緑被種別は、西部地域は農地や水面が多く、東部地域は樹林地が多く、中央部地域は緑被率は低いものの樹林地の割合は西部地域より高くなっています。



## Column》緑被率とグリーンインフラ

公園、農地や樹林地などの緑被地は、自然の力をいかすグリーンインフラとして、環境を守り、地域の魅力を高め、暮らしの質を高める大切な基盤です。



Common Nexus (名古屋大学構内)

これからの緑のまちづくりにおいては、公有地、民有地を問わず、グリーンインフラを確保していくことが求められます。

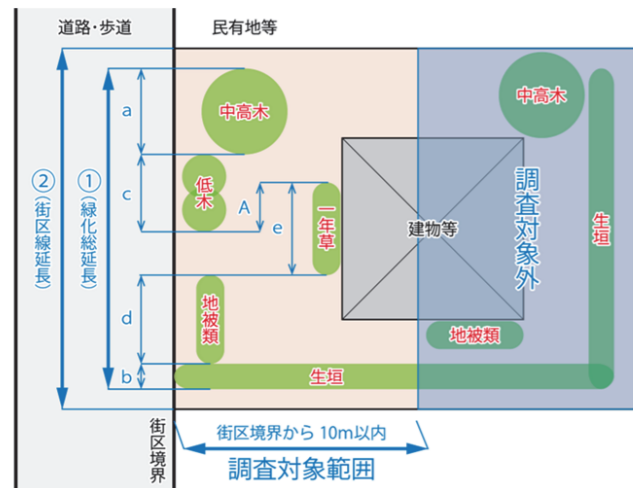
湾曲状の屋根を緑化し、雨を樹に集め、並木沿いの浸透管を通じ地中に浸透させることにより、植栽にうるおいを与えています。

写真提供：東海国立大学機構

# 名古屋市沿道緑化の分布

## 沿道緑化とは

「沿道緑化」とは、街を歩く人の目に映る緑のことで、民有地等に植栽されている緑を指します。本調査では、街区境界から奥行き10mまでの樹木や生垣、プランターだけでなく、高さ10mまでの壁面緑化や緑化フェンス、ベランダ緑化も沿道緑化としています。「沿道緑化率」とは、民有地等に接続する道路（街区線）の延長に対する緑化延長の割合のことです。



### 沿道緑化の一例



## 沿道緑化率の現状と変化

調査対象範囲の沿道緑化率は19.1%でした。エリア別にみると名古屋駅エリアが19.0%、伏見エリアが22.3%、栄エリアが16.8%と、伏見エリアが最も高い結果となりました。令和2年の沿道緑化率と比較すると、名古屋駅エリアが増減なし、伏見エリアが0.1ポイント、栄エリアが0.3ポイント増加し、全体では0.2ポイント増加しました。増加の原因としては、令和2年において建設中であった建物に、新たな植栽が整備されたことなどが挙げられます。



## 沿道緑化の延長

名古屋駅エリア	6.0km
伏見エリア	5.1km
栄エリア	5.5km
総延長	16.6km

例えば、栄エリアの5.5kmは中部電力MIRAI TOWERから熱田神宮までの距離に相当するよ！



## 調査の目的

本調査は、名古屋市における緑の現況調査の一つとして、街を歩く人の目に映る緑を把握することを目的に、令和2年度から始めました。

## 計測技術の活用

本調査では、都市再生緊急整備地域（名古屋駅周辺・伏見・栄地域）の街区線総延長約90kmを対象に、MMS（Mobile Mapping System）の計測技術を活用し、沿道緑化率を算出しました。

## MMS (Mobile Mapping System) とは

MMSとは、車両に搭載した3Dレーザスキャナや全周周撮影カメラ（360°カメラ）を使用し、正確な3次元位置情報を付与したカラー画像を取得できるシステムです。

MMSにより、広範囲なデータを効率的かつ高精度に収集でき、ソフトウェア上での緑化延長の計測も可能になりました。



計測機器を搭載した車両

## Column》民有地緑化コンクール なごやグッドグリーン賞

「なごやグッドグリーン賞」は、名古屋市内の民有地の優良な緑化事例を顕彰し、PRすることにより、民有地緑化の普及促進及び質の向上、継続的な維持管理を図ることを目的とした表彰制度です。この取り組みによって目に映る緑の量を高め、都市景観への貢献や都市の快適性の向上などが期待できます。



第4回 なごやグッドグリーン賞 受賞作品集



第4回 なごやグッドグリーン賞 大賞 愛知学院大学 末盛キャンパス



